うちの生徒会長サマ

黒玻璃来夢

1　形原　関　（かたはら　とおる）

キーンコーンカーンコーン。教室に帰りのホームルーム終了を告げるチャイムが響く。それを待っていたかのように（一部は待ってすらいなかったが）友人たちが席を立ち、帰ったり部活に向かったりと好きなことをし始める。

「はぁー」

そんな和やかな雰囲気の中、ため息をつきつつ鞄に教科書を突っ込む形原関がいた。彼の友人の一人が声をかける。

「よぉー、って何をため息なんぞついているのさ。放課後だろ？俺たちの時間だろ？あ、あれか、何かあったのか。よし、親友の俺が聞いてやる、だからアイスをおごれ」

形原は友人の頭をはたきつつ、不機嫌の原因を告げる。

「お前はアイスが食いたいだけだろうが。というか、分かっていてしているのか？嫌がらせか？僕はこれから生徒会に行かないといけないんだよ」

「セートカイ？あっ、そうか。お前1年なのに生徒会に選出されたんだっけ。カワイソーな形原クン。希望もしていないのに先生に推薦されて生徒会になって……ああっ、俺はどうしたら良いんだ！」

形原は再び頭をはたく。

「どうもしなくていいッ。生徒会が不在ってわけにもいかないんだから、先生も必死なのだろうさ。それを断れなかった僕が悪い。だから僕はこれから生徒会に行ってくる。お前が放課後を満喫している間、僕は生徒会室で先輩たちと睨めっこでもしているよ」

「八つ当たりはよくないぞ？まぁ、あれだ、今度アイスでもおごってやっから、元気だせよ」

「はぁ、じゃあな」

友人に手を振りながら、少しアイスを喜んだ自分にため息をつきつつ、形原は教室をあとにした。

形原は生徒会室に向かう廊下を歩いていた。

（確か、今回の生徒会は2年生が4人、1年生が2人の計6人。2年生の執行部員は全員経験者で、同じ役を務める予定。それで、僕の役が会計、こんなところかな。何でも、生徒会長が癖のある人だと噂に聞いている）

生徒会室前に着く。少し遅れてしまった。

（少し不安だけど、大丈夫だろう）

形原は生徒会室の扉を開けた。

生徒会室内は大きい1つの机が中央を陣取っていて、その周りに6個の椅子が並べられていた。椅子は出入り口側にない形でコの字型に各辺2つずつ配置されている。椅子の周

りには移動用のスペースと棚、と少々部屋の狭さを感じさせる配置であった。そして中で既に席に着いていた5人が一斉にこちらを見た。
「あ、遅れてすみません」
（大丈夫じゃなかったかも）
1つ空いている席に座ろうと形原はそそくさと動きだそうとした。そのとき、ちょうど正面に座っていた男女のうち、男子の方が口を開いた。
「君は形原関君だね。2分36秒の遅刻だ。別にこの程度の遅刻ならば実務に差しさわりがないので構わないが、僕の気分を著しく害するので謹んでいただきたいね。それから、校章が約0．3ミリほど傾いている。今日、おうちに帰ったら鏡を見ながら直すことをお勧めするよ、気が散る」
「……え。あ。すみません」
形原は驚いて数秒固まっていたが何とか返事をして席に着いた。それから桜中学の校章を見たが、文字は水平にしか見えず、首をかしげた。
　隣に座っていた男子が小さく声をかけてきた。
「もともとああいう奴だから、あまり気にするな」
「あ、はい」
「香川君、それで励ましているつもりかね？」
いくら声を小さくしてもこれだけ近くて無音であれば聞こえてしまう。先ほど形原に不満を漏らした男子は、形原を励ました男子、香川に標的を移した。
「そうそう、お前の遊び相手は俺なんだから、あまり1年をいじめるなよ」
「ふん」
男子は満足したのか、腕を組み、背もたれに体重を預けた。いきなりの出来事に動転していたが、落ち着いてみるとその男子はなかなか整った顔をしていた。背も高いし、きっと女子にモテるだろう。男にしては長いが女にしては短い黒髪は彼が動きにまとまってついていく。鼻が高く、すっと通っていて美しく、やや中性的な印象を裏切るように眼が鋭く細い。
「さて」
不機嫌な男子が立ち上がる。
「こんにちは、生徒会執行部のみなさん。ようやく全員が集まったようなので自己紹介を始めたいと思う」
ようやく、というところに力を入れて、形原の方を見ながら言った。
「とはいっても半分以上は昨年と同じメンバーだが。改めて私は生徒会長を務めさせていただく冨田真次（とみた　しんじ）だ。2年A組だ。大抵教室か生徒会室にいるので、用があるならそこをまず訪ねてみて欲しい。では反時計まわりでいこうか」
冨田が席に着き、隣に座っていた女子が立つ。こちらの女子も整った顔に鋭く細い眼を持っていた。女子にしては背が高い。黒髪は長く伸び、ポニーテールに結ってある……いや、

ポニーテールというには結う位置が低すぎる。どちらかというと髪をまとめたという印象を与える結び方だった。
「浅井翼（あさい　つばさ）です。生徒副会長を務めます。２年Ａ組です。いつも教室か生徒会室にいるので、御用の際はなんなりとどうぞ」
浅井が席に着き、香川が立ち上がる。彼も背が高かった。茶色く焼けた肌がスポーティな印象を与える。髪も坊主頭が少し伸びたくらいであった。
「香川介（かがわ　かたし）、２年Ａ組、会計担当。よろしく」
香川が席に着き、形原が立ち上がる。
「形原関です。１年Ｃ組で、会計担当です。よろしくお願いします」
形原が席に着くと、向かいに座っていた男子が立ち上がった。彼の肌も茶色く焼けていて、スポーティな印象を受ける。髪がやや茶色い。
「田中載頼（たなか　のりよし）、２年Ｂ組、書記担当です。よろしく」
田中が席に着き、隣の女子が立ち上がる。彼女は背が低く、小さな顔にメガネをかけている。髪は薄く茶色がついていて短かい。
「室井都（むろい　みやこ）です。１年Ａ組です。書記担当です。よろしくお願いします」
室井が席に着くと、冨田が口を開いた。
「全員の自己紹介が終わったね。今日は初めてなのだから、具体的なことはよしとしようではないか。室井君、形原君。君たち、家の方向は？」
「私は相模川の方です」
「僕は若松町の方向ですね」
「よし、では今日のところは親睦を深める意味も込めて、室井君は僕と浅井君、田中君と帰ろうではないか。形原君は香川君と一緒に帰るといい。今日のこの後は放課後扱いのトーキングタイムにするから、各々自由に親睦を深めてほしい」
田中がすっと手を挙げた。
「放課後扱い、ってことは帰ってもいいってことだよな？じゃあ俺、帰っていいか？」
冨田は田中にゆっくりと視線を移した。
「そうか、ではお先にどうぞ。あぁ、次の活動は３日後だ」
田中は席を立ち、さっさと部屋を出て行った。
「そうだな、もしかして室井君と形原君にも何か予定があるのではないかね？」
冨田は室井と形原を見る。香川が口をはさんだ。
「俺には聞かないのか」
「私に予定はない。浅井君にも予定はないだろう。君に予定？行き当たりばったりがモットーである君に？ないに決まっているではないか。あったとしても大した用でもあるまい」
冨田は香川をちらと見、香川は机に肘をついて頭を抱えた。隣から小声で
「あーもう、予定なんてねーけどさ……」
と聞こえてくる。

「あの、私はちょっと……」
室井がもごもごと口を開いた。
「む、では少し早いが今日はお開きとしよう。よかったな、君の大したことのない用事を問題なく済ますことができそうだぞ、香川君？」
こうして生徒会一日目は終わった。
冨田、浅井、室井と別れ、香川と二人で帰路に着いた形原は香川に話しかけた。
「あの、1つ質問をしても良いですか？」
香川は、ふっ、と笑った。
「え？」
「あ、いや。真次だったら『はぁ、君は質問をすることに許可を求めるのか？だとしたらその質問は誰の許可があってしているのかね？実に興味深いね』とでも言うだろうと思ってな。あ、どうぞ」
「真次って、冨田先輩のことですよね。先輩はいつでも誰に対してもああなのですか？どうして……香川先輩もあのような言い方をされても嫌そうな顔をしていませんでしたよね」
「はは、俺はあいつとガキの頃からの仲だからな。もう慣れたよ。まぁ、あいつも最初からああだったわけじゃないが……」
形原はしばらく待っても香川が黙ったままなので急かした。
「何かあったのですか？」
「ま、いろいろな。あまり他人がペラペラ言うものじゃない。本人に聞きな。もっとも、教えちゃくれないだろうがな。口ほど悪い奴じゃない。仲良くしてやってくれ」
「自信、ないですね」
「はは。お？」
香川はちょうど今通り過ぎた店を指さした。
「あそこのアイス、ちょうど明日から割引になるんだ。よかったら明日一緒に食べないか？」
「あ、いいですね。生徒会のことについて、少し聞いておきたかったですし」
「よし、じゃあ明日な」

翌日の放課後、形原は1年C組の教室にいた。そして昨日と同じ友人に、昨日と同じように捕まっていた。だいぶ香川を待たせている形原はやや焦っていたが、話を切れないでいた。
「で、どうだったんだよ、初日の生徒会は？」
「どうって言われてもな。順調？だな」
「噂の生徒会長はどうだったんだよ？」
「どうって言われてもな」
「なーんか、ありそうな人だよな。流れている噂は悪いものばかり。生徒会長の素顔を探れ、形原関よ！」

形原はぺしりと友人の頭をはたいた。
「お前が知りたいだけだろうが。僕は会長のことなんて知らないよ。面倒事はごめんだ」
「形原ぁー」
形原が呼ばれて振り向くと教室の前に香川が来ていた。
「あ、すみません、今行きます」
「誰？」
「生徒会関連の香川先輩。これからアイスを食いに行く」
「なっ、お前、昨日は俺におごるって言っていたじゃないか！」
形原は再び友人の頭をはたきつつ逃げた。
「言ってねーよ。じゃあな」
形原と香川が並んで歩きだす。
「悪いな、話の途中だったか？」
「いえ、どうせくだらない話ですから。すみません、お待たせしてしまって」
「いや、別に急ぐこともないからな……ん？」
昇降口に向かっていると右の廊下から笑い声が聞こえてきた。皆家に帰るか部活に行くかしたのだろう、友人の長話につき合わされたおかげで廊下にほとんど人がいなかった。だから話の内容がよく聞こえる。
「――僕だってできるんだとか言っちゃってさ。何様だって言うんだよなぁ？」
「うわぁ」
「それでどうなったんですか？」
「いじめの標的になっていたみたいだな。俺は部外者だったが、ざまあみろって感じだった」
「えー、先輩ひどくないですかぁ？」
形原が驚いて話をしている人物たちをよく見ると、いずれも男子でクラスメイトと知らない生徒、生徒会書記の田中の３人であった。
「あいつ……！あ」
香川は止めに入ろうとそちらへ向かいだしたが、途中で廊下の奥から来る人物を認めて、足を止めた。
形原が見ると、それは冨田真次であった。

2　室井　都　（むろい　みやこ）

既に授業は終わり、放課後。室井は1年A組で友人と椅子に腰かけて話をしていた。友人が口を開く。

「ねぇ、都。昨日の生徒会はどうだった？冨田先輩、かっこ良かった？」

「はいはい、かっこよかったよ。でも性格がちょっとねぇ？」

室井にはどこがいいのかわからなかったが、友人は冨田先輩のことを好いていた。

「そこがまたかっこいいんじゃないの！ねぇ、あの先輩の方はどうだった？」

「どうもこうも、一緒にいたわよ？帰るときも私と先輩と3人で帰ったし」

「え！冨田先輩と一緒に帰ったの？ずるーいっ」

室井は面倒になり、半ば投げやりに答えた。

「私は先輩のことどうとも思ってないし。むしろあまり好きじゃないし、3人だし」

「でもさ、都を含めて3人でしょ？ってことは今までは2人で……許せない！」

「男の先輩も一緒に4人で帰る予定だったんだけど、用があるとかで先に帰ったから3人で帰ったの。だからもともと3人で帰っていたかもよ？というか、親睦を深めるために一緒に帰っただけだから、普段は1人で帰っているかもよ？」

「うーん。私、何かあの先輩が気に入らないのよねぇ。冨田先輩に興味がないような顔しながら、絶対狙ってるって、みんなそう言っているよ。いつも背後霊みたいにくっついちゃって、鬱陶しいったらないわ。去年だって、生徒会長と副会長を同じペアでやっていたんでしょ？腹立つわぁ」

室井も浅井については友人の気持ちがわからないでもなかった。室井は冨田のことを快く思っていなかったが、それでも浅井には不快感を感じた。きっときれいな女ときれいな男が互いに距離を縮めながら、互いに素知らぬ顔をしていることが気に食わないのだ。そしてそんな自分が気に入らない……。

「浅井先輩は冨田先輩のこと、何とも思っていないと思うけどな。でも確かに、むかつく」

「でしょでしょ？むかつくでしょー？」

「はいはい、叫ばない叫ばない。あれ？」

「どうしたの？」

ふと廊下を見ると田中が教室の前を男子2人をつれて通っていった。

「ねー、どうしたのっ」

「はいはい、何でもないよ。そろそろ帰ろう？」

室井は面倒になって帰ることにした。

3　田中　載頼　（たなか　のりよし）

既に授業は終わり、放課後。田中は2年B組を出て、1年D組の教室に向かっていた。教室の外から中で待っているはずの後輩2人に声をかける。
「おいっ、遅くなったな」
「あ、田中先輩」
「待ってましたよぉ」
2人をつれて教室を出て、廊下を歩く。
「生徒会初日はどうでしたか？」
「去年と同じ、退屈なものさ。相変わらず面倒だし、用があるとか言ってさっさと帰っちまった」
「はは、面倒って、やっぱり冨田先輩ですか？」
「それ以外に何があるんだよ」
「冨田先輩って変わってますよねぇ。あの、何人もの女子から告白されているのに全てその場で断っているって噂、本当ですか？」
「全てかどうかは知らんが、その場で断っているって話はよく聞くな。しかも断り方がひどい。一部では『僕は僕に好意を抱く人間が大嫌いなんだ、そう君のように』なんて言っているって話だぞ」
後輩たちはあからさまに顔をしかめた。
「ひどいなぁ」
「何ですかそれ。僕、冨田先輩のこと、あまり好きじゃないです」
「好きな奴なんていないだろ、あんな奴」
「……浅井先輩はどうなんでしょうか」
田中は後輩をちらと見た。
「さぁ、知らん」
「あんな美人が近くにいるのに放っておくなんて……」
「おいおい、そりゃ浅井は見ようによっては美人だが、何考えているのかよく分からんアブナイ奴だぞ？」
「そのよくわからないところがいいんじゃないですか。ああっ、何だか無性に腹が立ってきました！」
田中はくくっと笑って立ち止まった。
「じゃあそのいら立ちを吹き飛ばすような面白い話をしてやろうか」
「え、何ですか？」
後輩たちはあからさまに目を好奇心で輝かせる。
3人は昇降口付近まで来ていた。田中は後輩たちと脇の廊下に入った。
「ちょっとこっちに来い。さすがに昇降口でできる話じゃないっての」

田中は大きく息を吸ってから話し始めた。
「冨田には奴よりもよくできたお兄ちゃまがいるんだぜ」
「え、冨田先輩に兄弟がいるんですか？初めて聞きました」
「冨田先輩って学年トップの成績でしたよね？それよりすごいってどういう……」
「天才の上を行く天才って奴じゃないか？お前らが知らないことは仕方がないさ、あいつが必死こいて隠しているからな。だって普段のあいつの態度を見てみろよ。自分はよくできた人間なんだー、みたいな顔しているのに、自分よりも優秀な兄貴がいるんだぜ？立場がないだろう。それに実際、奴に兄貴がいるって学校で噂になったときはすごいことになったしな」
田中はわざとここで間をおいた。
「すごいことってなんですか！」
「もったいぶらないで下さいよ！」
田中はふっふっふ、と笑ってから続けた。
「小学生だったとは言え、泣きながらだぜ？くくっ、僕だってできるんだとか言っちゃってさ。何様だって言うんだよなぁ？」
「うわぁ」
「それでどうなったんですか？」
「いじめの標的になっていたみたいだな。俺は部外者だったが、ざまあみろって感じだった」
「えー、先輩ひどくないですかぁ？」
「ひどい？俺が？あいつの方がひどいだろ。あの態度だぜ？それなのに頭が良くて女子にモテる。正直、うざいと思うだろ？」
「否定はしませんけど……」
「やあ、田中君。楽しそうに、立ち話かね？」
田中が驚いて振り向くと冨田が立っていた。
「え？あぁ。……えっと、お前、いつからそこにいた？」
「いつって、ついさっきだ。おしゃべりが楽しいことはわかるが、あまり長くすることには感心しないな。部活などの用がない生徒は早く帰った方がいい」
冨田が歩き出して田中の横を通り過ぎた。田中の視線は冨田を追う。
　冨田は少し行ったところで立ち止まり、そうだ、とつぶやいて振り返った。
「そうそう、廊下ではあまり大切な話をしない方がいい。ここは声が響くからな……馬鹿に見えるぞ」
「――うっ、ちっ」
田中は舌打ちをすると速足で冨田の横を通り抜けて昇降口に向かった。昇降口の方から香川と形原がこちらを見ていることに気が付いた。田中は2人の横も通り過ぎて靴箱に向かいながら、もう一度舌打ちをした。

4　香川　介　（かがわ　かたし）

田中が香川と形原の前を速足で通り過ぎた。その直後にかすかに舌打ちが聞こえる。
田中を追っていた目を冨田に移すと、ちょうど唖然としている男子生徒２人に冨田が追い打ちをかけているところだった。
「君たちも早く帰りたまえ」
冨田が苦々しく言い放つと、１人は返事だけをして足早に歩きだし、１人は失礼します、と冨田にお辞儀をしてから歩き出した。後から来た生徒が香川と形原の前を通り過ぎるときに、一瞬だけ驚いたように形原の方を見た。
（もしかして、クラスメイトか？何もなければ良いが）
香川は少しだけ形原のことが気になったが、冨田に視線を戻した。
冨田は大きくため息をついてからこちらに向かって歩き出した。少しするとこちらに気が付いた様子で、一瞬だけ驚いたような表情を見せてからこちらによってきた。（香川にとっては）いつものニヤニヤした顔を向けながら。
それを見て香川は少しだけほっとする。
「やあ、これはこれは、形原君。と、香川君。人の話を盗み聞きとは、なかなか良い趣味をしている」
香川は笑って大きく息を吐き、少しおどけて返事をする。
「どうせ大切な話でもねぇだろ？」
冨田はふっと笑った。
「ああ、そうだな。くだらん話だ」
「……大丈夫か」
冨田は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元のニヤついた顔に戻った。
「何の話だ？君の頭の話かね？私なら平気だが」
香川は大きくため息をついて俯いたが、これは安心したためであった。
「では僕はこれで失礼するよ。生徒会室に浅井君を待たせているのでね」
冨田はそれだけ言うと行ってしまった。
「それじゃあ、俺たちも行くか」
香川と形原は帰るために歩き出した。
店に向かう道を歩いていると、形原が口を開いた。
「えーっと、僕たちがこうして外を歩いているということは、今日は生徒会がない、ということですよね？」
香川は突然の質問にやや驚きつつも返事をする。
「ん？あ、ああ。次の生徒会は明後日だな」
「ですよね。では冨田先輩と浅井先輩は生徒会室に何の用があるのでしょうか？」
「あー、それか。一応生徒会ではみんなの意見を集めようってことで、生徒会室に誰かが

いるようにしているんだ。それが、言いだしっぺが真次でな。自分が言い出しておいて人にやらせるのは悪いってんで、自分がいるわけだ」
香川は一度ここで話を切り、形原の様子を見る。
「そんなことしていたんですか。でも意見を聞きたいだけなら、意見箱でもおいておけば良いんじゃ？」
「それでだめだったから、直接聞く形にしたんだよ」
「そうですか……でも、失礼ですけど、冨田先輩に相談したいと思う人っているんですかね？」
「いないだろうな。まぁもともと、そういう活動をしているんだってことを知っている奴が少ないからな。だから、ほら、その、悪い噂が立つんだよ。あいつら何やってんだーってな」
香川は頭を掻いて大きなため息をついた。
「はぁーっ、たくっ。あいつら、悪い噂の原因の１つがそれだってわかっててやめないんだもんなぁ。心配するこっちのことも少しは考えてほしいぜ」
「どうして浅井先輩まで一緒にいるんですか？冨田先輩１人でいれば良い話ですよね？」
「俺もよく知らんが、浅井はなぜかいつも真次と一緒にいたがるんだよな。ほとんどいつでも一緒にいる。それが尚更悪い噂を呼ぶ。はぁーっ、真次の奴、『浅井君に害はない。そして彼女は優秀だ、大抵の頼みは聞いてくれる。さて、どこに彼女を遠ざける必要がある？君ならともかく』とかぬかしやがって、悪い噂が立っているんだっての、少しは気にしろっての！」
形原は香川を落ち着かせようとした。
「まぁ、まぁ。先輩、落ち着いてくださいよ。ほら、通り過ぎそうになっているじゃないですか」
「え？」
振り向くと、アイスの店をほんの少し通り過ぎたところであった。
　中に入って注文する。香川はバニラ、形原はチョコだった。会計を済ませてからアイスを受け取り、席に座る。いただきます、とあいさつをして食べ始める。一口、二口……半分を過ぎても互いに無言であった。
　アイスも残り４分の１を残す頃に、香川が口を開いた。
「なぁ……やっぱり……気になっているよな？」
「え？あ、田中先輩と冨田先輩のことですか？えぇ、まぁ、気にならないと言ったら嘘ですけど。状況から田中先輩が冨田先輩の話をしていたことくらいはわかります。でも話さなくて良いですよ」
香川は「へ？」と間抜けな声をあげた。
「なんで？気になっているんだろう？」
「気にはなりますけど、嫌いなんで。そういう、面倒なこと」

「面倒って、はっきりしているなぁ。お前なら話しても大丈夫そうだ」
「先輩って、意外と嫌な人ですね」
香川が苦笑する。
「そう言わずに聞けよ、知っていた方が避けやすいこともあるだろう？」
形原はアイスを完食した。そして黙って香川を見つめた。
　香川は残りのアイスを口に放り込み、それが口から消えると話を始めた。
「真次はガキの頃から成績優秀でな。その頃はあんな嫌味な奴じゃなくてな、結構みんなに褒められて素直に喜んでいたもんだ」
香川はふぅ、とため息をついてから続けた。
「でも、あいつの家族はそうじゃなかった。あいつには年が離れた、もっと優秀な兄貴がいてな。両親はそっちに目を奪われっぱなしさ。両親も、その兄貴も、全く悪い人ではなんだが……寂しかっただろうな」
香川はふふっ、と笑った。
「真次の奴、公園のブランコでメソメソ泣いていたときがあってな。気になったから、声をかけたんだ、大丈夫かってな。そうしたらあいつ、『算数のテストで９７点をとっちゃったんだ』だと。張り飛ばしそうになったぜ」
香川の顔から笑みが消えた。
「たぶんあいつも両親に褒められはしていたはずだ。でも比べられちまったら、敵わなかったからな。いつしかあいつの居場所は学校に移っていた……そんな時だ、あいつに兄貴がいるって噂が学校に広がったのは」
香川は苦しそうな顔をして眼を閉じた。
「学校はあいつにとって唯一、本当に自分を認めてくれる仲間がいるところだったからな。そこにまで兄貴が現れたような気がしたんだろう。誰かが言ったんだ、お前は自分のことを優秀な奴だと思っているだろうが、兄貴には敵わないって。どこにでも気に入らない奴は居るもんだ。無視しておけば良いのに、あいつは『お兄ちゃんはすごくなんてない、僕だってできるんだ』って叫んでな。羨ましいと妬ましいは紙一重の違いだったのだろう。学校中の連中から無視されたり、陰口を叩かれたり……」
香川は苦しそうに顔を俯けた。
「しばらくしたらイジメは止んだ。たぶん、飽きたんだろう。でもそれからあいつは、ひねくれるようになった。そりゃそうだ、学校中の奴らがあいつを裏切ったんだからな……俺だって。きっとあいつは今でも俺のことを恨んでいる」
「あー、そんなことがあったんですかー」
形原の気のない相槌に香川はゆっくりと頭を上げた。
「おま……」
「僕には関係ないです。僕は生徒会の一員で、冨田先輩は生徒会長。僕と彼をプライベートで繋ぐものは何もありません。僕にとっては他人事です」

香川は形原を黙って見つめた。
「お前、想像以上に冷たい奴だな」
「僕が冷たいのではなくて、先輩が熱すぎるのですよ。冨田先輩のことなんて放っておけば良いじゃないですか。先輩にとってはただの他人でしょう？友達なんて、所詮は赤の他人ですよ」
「友達は他人、ね。やっぱりお前冷たい奴だ。でも想像以下だったわ」
「え？」
「本当に冷たい奴はそんなことを言わない」
形原は恥ずかしそうに顔をそむけた。
「会計担当の先輩が暗い顔をしていたら、仕事が捗りませんからね。それだけです」
「そうかい」
香川はそう言うと形原のアイスの空カップを手に取り、ごみ箱に向かった。

5　浅井　翼　（あさい　つばさ）

（会長、遅いなぁ）
そんなことを考えながら、浅井は生徒会室を掃除していた。生徒会があった翌日には生徒会室を掃除することが浅井の習慣になっていた。今日は冨田も意見待ちついでに掃除を手伝うことになっていて、先に行っていろと言われていた。浅井にとって冨田に生徒会室で待たされることはいつものことだが、この日は特に遅かった。
　もう掃除が一通り終わる、そんなときに部屋の扉がガラガラと音を立てて開いた。
「遅くなってしまってすまない。もう終わってしまったかな？」
「会長。はい、もう終わりますが御気になさらないでください」
「そう。いつもすまないね」
浅井はたまったゴミを塵取りに入れてゴミ箱に捨てた。これが最後の塵の山だったので、そのまま掃除用具ロッカーに箒と塵取りをしまいに向かう。
　掃除用具ロッカーの戸を閉めて会長の方を向くと、会長は既に椅子に座っていてその隣の空いた椅子をポンと叩いた。浅井は冨田の指示通りにそこへ座る。
「いつもありがとう。本当に助かるよ。もちろん掃除だけではなくて、いろいろな頼みごともね」
冨田は浅井と2人きりの時にしか見せない、飛び切りの笑顔と明るい口調で言った。浅井は顔をそむけ、
「いえ……」
と言いながら
（また、だ……）
と思い、一瞬だけ緊張した。
「どうして顔をそむけるんだい？照れたのか？」
（振り向かないと。緊張しちゃ……ダメッ）
浅井は冨田に振り向き、完璧な無表情と完璧な棒読みで答えた。
「お褒めいただき、大変うれしく思います」
「ふふっ、本当に君は優秀だね。僕は君の優秀さと長い黒髪と……そう、この綺麗な手が好きなんだ」
ふいに冨田が浅井の手を取った。浅井が驚いて一瞬だけ反応をすると、冨田は笑顔をふっと消して、目をゆっくりと開けた。
（まずい）
「どうしたの？」
今までと打って変わって低い声で冨田が問う。
「どうも致しませんが？」
必死で何もなかったようにふるまう。

「そう？今……」
相変わらず声は低いままで冨田は浅井の手に視線を落とす。そのままゆっくりと頭が傾き始めた。
（手の甲にキスをする気だ）
浅井は勢いよく手を引いた。
冨田はゆっくりと顔をあげ、浅井の方を向く。今度は笑顔と明るい声で言った。
「僕のこと、嫌い？」
「いえ」
「じゃあ、好き？」
「いえ」
「じゃあ、何？」
短い沈黙の後で浅井は答えた。
「会長は、会長です」
冨田の顔から笑顔が消えた。冨田は顔を浅井の顔に近づけ、浅井の頭の上に自身の手をポンと乗せた。無表情のままいつもの声色で言う。
「……本当に君は優秀だよ」
冨田はそのまますっと立ち上がった。
「今日も誰も来ないようだね。そろそろ帰るか？」
「……はい」
浅井は小さく浅く呼吸をしながら答えた。
「浅井君」
冨田の呼びかけに浅井が振り向くと、冨田は浅井に背を向けて立っていた。
「君は死にたい――殺したいでもいいか、そんなことを思ったことがあるかい？」
「いえ、ありません」
「人は不適切なときに、不適切な場所で、不適切なことを言われると死ぬそうだ。怖いと思わない？」
浅井は首をかしげて答えた。
「いえ、思いません」
冨田は振り向いて苦笑した。
「そう、そうだな。優秀な君が、不適切なことをするわけがない。うん、帰るか」
この日は2人で帰った。

浅井は家に戻り、自身の日記帳を眺めていた。小さい頃から日記をつける習慣があった。今見ているページは中学校入学当時のものだ。
浅井は小中一貫校である桜小中学校に中学から入った。冨田とは同じクラスになった。一目惚れだった。机で本を眺める冨田に窓から灯りが差し込んで当たっている姿を見て、

恋に落ちた。
　しかし冨田の評判はすこぶる悪かった。新しくできた友達全員が悪い噂を持っていた。見るからに無愛想な人だとは思っていたが、想像以上だった。友人の1人は愛の告白をしたにも関わらず『僕は僕に好意を抱く人間が大嫌いなんだ』と言われて恨み辛みを持っていたようだった。浅井にとっては敵が1人減ったのと、彼の貴重な情報が手に入っただけだったが。
（あの人は、自分のことを好きな人が嫌いなんだ）
理由はわからないが、そのような不思議な考えを冨田が持っていることは明らかだった。
　冨田は成績優秀で、先生に生徒会長を任された。まだ一年生であるにも関わらず、だ。冨田が生徒会長に立候補すると聞いて、浅井はすぐに副会長に立候補することを決めた。冨田に好意を気取られずに近づくにはこれしかなかった。
　今のところは順調だ。冨田は何かにつけて浅井の好意を確認してくるが、何とか切りぬけている。今日の冨田の行為も浅井が好意を持っていないことを確認するためにされたことだった。
（でもいつまで保つかしら）
浅井はため息をついて日記帳を閉じた。

　翌日の昼休み。いつも通り、冨田が自身の席で本を読み、浅井がその後ろに立っていた。ふいに教室の戸が開き、生徒会書記担当の一年である室井が入ってくる。
「浅井先輩、冨田先輩、こんにちは」
「室井君か。どうしたのかね？」
室井は言いづらそうにちらと私を見てから答えた。
「その、浅井先輩に相談がありまして。ご都合が良ければ今日にでも話を聞いてもらいたいのですが」
会長は浅井に視線で問いかけた。
「今日は何の予定もないのでそれは構いませんが、会長？」
今度は浅井が冨田に視線を向けた。
「ああ、生徒会室を使いたいのか？かまわないよ、僕のものでもないし。僕は予定があるから、先に帰らせてもらうがね」
「はい、わかりました。ありがとうございます。では室井さん、今日の放課後に生徒会室で待っていてもらえますか。私もすぐに行きますので」
「わかりました。ありがとうございます。それじゃ」
室井は深々と頭を下げてそれだけ言うと、すぐに帰った。浅井が室井の背中を眺めていると後ろから浅井君、と会長の声がした。浅井が振り向くと冨田は既に本を開いて読んでいた。
「室井君は君に何の相談があるのだろう」

「わかりません」
「大体、室井君と浅井君は相談事をするような仲なのかい？」
「この間の生徒会が初対面です」
「一緒に帰っているときも、そんなに仲が良いようには見えなかったが」
冨田がパタリと本を閉じた。冨田が本を開いているときは思考をしているときで、実際に読んではいないことはこの一年でわかっていた。
「率直に言って僕はあの子が嫌いだ」
浅井は驚いた。室井は冨田に好意的な印象を与えるような行動をここまで取っていないため、むしろ好まれていると思っていた。
　冨田が室井のどこが嫌いなのか。この問題は浅井にとって大きなものであった。いつ自分が同じ轍を踏んでしまうか、わかったものではないから。
冨田は浅井の方を向いた。
「悪い予感がする。少し気を付けた方が良い」
「はい。ご忠告ありがとうございます」
浅井はどう気を付ければ良いのかと思うとともに、冨田らしくないセリフに首をかしげた。

　その日の放課後。浅井は生徒会室に向かい、戸を開けた。室井は既に中で立って待っていた。
「遅くなってごめんなさい」
「いえ、私の相談に乗ってもらうのですから、気にしないでください」
狭い生徒会室の中で立ったまま見つめあう。
「それで、相談というのは何ですか？」
「単刀直入に聞きますけど、先輩は冨田先輩のことをどう思っているのですか？」
浅井の眉がピクリと動いた。
「相談というのは、それ？」
「はい」
「あなたには関係ないことです」
室井はため息をついた。
「はい、私には関係のないことです。私は冨田先輩のことを好いているわけでもないし、浅井先輩のことを妬んでいるわけでもない、はずです。でも何か、腹が立つんですよね。先輩方が２人でいるところを見ると。どちらも気がないみたいな顔をしているけど、そんなわけがないし、実際そうではないと思います。先輩が、浅井先輩がはっきりとそういうつもりなんだって言ってくれれば、すっきりすると思うし、実際にそうだと思うのですが」
（どうしよう）
浅井は真実のイエスも嘘のノーも言えない状態であった。イエスと答えれば確実に会長にバレる、その上こいつの悪意に満ちた噂付き。ノーと答えれば問い詰められるのは必至で、

逃げ切れるかどうか怪しいし、そもそも言えない。
　浅井が逡巡していると室井はいら立ちを隠さずにゆっくり浅井に近づいてきた。
「どうなんですか？はっきりしてよ。黙っていれば済むとでも思っているの？」
「あなたの恨みの対象は私だけなのでしょう？会長を巻き込むような真似はやめてください」
「何それ？私が何したって言うの？聞いているだけじゃない。恨みって何？もう、何なのよ！」
室井は浅井の肩をつかむと強く押した。浅井はバランスを崩して倒れ、机が床を擦ってずれる音がした。
「私はあんたが嫌いなの！冨田先輩といつも一緒にいて気がないみたいな顔してさ、私は優秀なんですって顔しちゃってさぁ！鬱陶しいのよ毎日毎日、あんた邪魔なのよ！」
室井がそこまで叫んだ時、生徒会室の戸が勢いよく開いた。
「何してる」
恐ろしく低い声がした。浅井が恐る恐る振り向くと、そこには冨田が立っていた。室井は固まったままだ。
（嘘、会長？どうして、用があるから帰るって言っていたのに）
浅井も床に倒れたまま固まっていた。冨田は戸を閉めて、室井から目を離さないまま再び口を開いた。
「何をしているのかと聞いている」
室井は反応できない。一言の返事も、些細な動きも冨田の怒気によって封じられてしまっている。
（会長、ものすごく怒ってる……！）
浅井は冨田が本気で怒った相手がどうなるかを知っていた。方法は知らないが、冨田はどうにかして相手を追い詰めた。必ず相手は学校に来なくなるか、転校するか、非行に走るかをした。タイミングからみて、冨田が糸を引いているとしか思えなかった。
　このまま放っておけば室井がその対象に選ばれることは間違いない。そしてそれを阻止できる人間は浅井しかいなかった。
「――おしゃべりをしていただけです」
冨田は初めて気が付いたように浅井に顔を向け、
「浅井君？」
と猫なで声で呼びかけた。黙っていてくれないか。そのような声が聞こえたような気がして浅井は一瞬総毛だったが、立ち上がって言葉をつづけた。
「おしゃべりをしていただけです。本当です。それだけです」
冨田は浅井をしばらく見つめた後、ため息をつくと、そう、とだけ言って室井の方を向いた。
「室井君、今日は僕と一緒に２人で帰らないか？」

「えっ？」
室井は冨田の意外過ぎる言葉にまともに反応できないでいる。
「浅井君は机を直しておきたまえ」
冨田はちらと浅井を見るとそう言い残して部屋を出た。室井が慌ててその後を追った。浅井はその場に座り込んだ。
（良かった、これで大丈夫だ、きっと）
浅井は大きくため息をつくと床に寝転がった。
（たぶん、会長が室井さんのことを嫌いなのは彼女が私に敵意を向けていたからだ。さっきの会長は明らかに怒っていた、私のために）
浅井の口が醜く歪んだ。

翌日の昼休み。いつも通り、冨田が自身の席で本を読み、浅井がその後ろに立っていた。それはいつも通りなのだが、冨田はいらだっているようだった。本のページをめくるスピードが速すぎる。もとより読んでなどいないのだが、これでは読んでいないことがバレバレだ。浅井が心配そうに冨田を見ていると香川が話しかけてきた。
「真次、おい、聞いたぞ。お兄さんが戻って来るんだって？」
冨田はピタリと本をめくることを止めて香川を見た。
「誰に聞いた」
「誰って、そこらじゅうで噂になっているぞ」
「おい冨田」
遠くから大きな声で呼びかけたのは田中だった。
「聞いたぞ、お前の優秀な兄さんが日本に戻って来るらしいな。良かったじゃねぇか」
冨田はふっと笑って答えた。
「ああ、よかったよ。ありがとう」
それを聞くと田中は面白くなさそうに鼻を鳴らして去ってしまった。
「おい、大丈夫か？」
香川が心配そうに冨田の顔を覗き込む。
「大丈夫だ、もう僕だってガキじゃない。あんな子どもっぽい挑発に乗るか」
冨田が微笑んで言った。
明らかに異常だった。普段の冨田だったら、ニヤニヤと嫌味っぽい顔をしながら言うはずだった。間違っても微笑むはずがない。無論、香川と浅井はその異常を察していた。
「少しお手洗いに行って来るよ。失礼」
冨田は香川を押しのけて教室を出ていく。
（吐きに行くんだ）
浅井はそう思ったが、女である浅井は男子便所には入れない。というより、冨田は浅井が来ることを嫌ってそこを選んだような気配がある。何もできない自分、拒まれた自分が腹

立たしく、浅井は握りこぶしを作った。
香川は少しの間そんな浅井を困ったように見つめていたが、しばらくして冨田を追って教室を出た。２人は次の授業の直前まで戻ってこなかった。

そして生徒会に室井都が来なかった。他は既に全員集まっていた。
「遅い」
会長がいら立ちを隠さずに言った。
香川が困ったように口を開いた。
「おかしいな、今日、校内では見かけたんだが。形原、何か聞いていないか？」
「知りません」
形原の僕に振らないでください、という視線と香川の冷たい奴、という視線が交錯した。
香川は同じ一年である形原ならば何か聞いたかもしれないと思っただけだろう。
やや重い空気の中、次に口を開いた人間は田中であった。
「いやぁ、おかしいな。一年がたった二回目の生徒会を無断欠席かぁー。生徒会長なら、何か思い当たるところがあるんじゃないですかね？」
「……言いたいことがあるならはっきり言いたまえ」
冨田はちらと田中を見た。田中は嫌らしい笑みを見せながら続けた。
「俺、昨日見たんだよね、会長と室井サンが一緒に帰ってるところ。そんで別れ際に室井サンが走って、あれ、泣いてましたよね。何かひどいことでも言ったんじゃないですか？」
「君には関係ないことだ」
「いやいや、そんなことないでしょ。実際、彼女は来ていないわけだし。何か言ったんじゃないんですか、会長、今いろいろ大変でしょ？例えばオニイサ――」
「止めろ」
香川が止めに入った。
「香川サンには関係ないっしょ」
「お前もな」
２人が静かに睨み合う。
冨田がため息をついて提案をした。
「悪いが、やはり今日は先に帰らせてもらうよ。朝から気分が悪くてね」
「へぇ、お兄さんによろしく」
すかさず田中が口をはさむ。いつもならば鼻を鳴らすところだが、今日の冨田はすこぶる機嫌が悪かった。
「黙れ」
「おー怖い。やっぱりお兄さんのコト、嫌いなんだ？」
「黙れと言っている」
「真次、早く帰れ」

香川の良心からの言葉だったが、タイミングが悪かった。
「君に言われなくても帰る！というより、君も一体何なんだ？近づいてきたと思ったら離れて、そのうちまたベタベタと……どうせ離れるつもりなら近づくな、あの時だって――！」
冨田はそこでハッと言葉を切った。
香川がゆっくりと冨田を睨んだ。
「あの時だって、何だよ？あの時っていつだよ？お前こそ、言いたいことがあるならはっきり言ったらどうだ？」
「帰る」
帰ろうと戸に向かった冨田の腕を、立ち上がった香川がつかんだ。
「待てよ、言い逃げか？」
「離せ、裏切者っ」
裏切者――その言葉に衝撃を受けた香川の手はあっさりと解けた。
「おまえ、本気でそんなこと」
「うるさい」
冨田は勢いよく戸を開けて出て行った。
香川は衝撃から立ち直れていないし、形原は明らかに面倒がっているし、田中は面白がっていた。今、冨田を追える人間は浅井しかいなかった。
浅井は小走りに戸に向かい、香川を押しのけて廊下に出た。冨田の背が見えた。
「会長！」
浅井が呼ぶと、
「来るな！」
とだけ叫んで冨田は走りだした。浅井は角に消える冨田の後ろ姿を見つめていた。

最終章　冨田　真次　（とみた　しんじ）

階段を駆け下りながら冨田は後悔していた。香川に言ってはならないことを言った。しかも感情的に。浅井には来るなと言ったが、本当は追って来て欲しかった。誰かに自分を必要だと言って欲しい。

そんな女々しいことを考える自分が嫌で押し殺した。一階に着いた。足が速くなる。

（誰か、頼む、僕を止めてくれ）

自分がこれから何をしようとするかはわかっていた。そうしようと決めたのも自分だった。でも、誰かに止めて欲しい。明らかに矛盾しているし、自分でも面倒な奴だと思った。

「会長」

後ろから浅井の声がした。

（来てくれたか）

来るのは浅井だと思っていた。自分を止めようとしてくれるのも、止められるのも浅井以外にいないと思っていた、ずっと、前から。

冨田は振り向かずに言った。

「来るなと言ったはずだが」

浅井は返事をしない。

「前に言ったろう？人は不適切なときに、不適切な場所で、不適切なことを言われると死ぬ。僕は今不適切なときで、君の言葉は全て不適切になるだろう。だから黙って戻ってくれないか」

浅井は返事をしない。

（浅井君には荷が重すぎたか）

自分に嘲笑しながらあきらめて歩を進めようとしたそのとき、返事が聞こえた。

「でも会長は、これから不適切な場所に行こうとしていますよね」

冨田はゆっくりと浅井の方に振り向いた。

「私も行きます。会長がなんと言おうと、ついて行きます」

冨田は切れそうな声で叫んだ。

「来て、どうするんだ？僕に止めを刺すのか？」

助けてくれ。自分の一言一言に込められたその気持ちを浅井に見透かされていることを思うと、冨田は自分が情けなくてしょうがなかった。

「なんと言われようと、行きますから」

浅井は冨田の横を通って昇降口に向かった。

冨田と浅井は冨田の家の前に立っていた。

「本当に入る気か？後悔しても知らんぞ」

「何度も同じことを言わせないでください」

家に着くまで同じような会話を何度もしていた。それでも浅井はついて来た。正直に言って、冨田はそれだけで満足だった。
　冨田は完璧な笑顔を作ってから家の戸を開けた。
「ただいま」
「おかえり――あら？」
女性が出迎えてくれる。母だ。浅井が冨田の隣で、初めまして、と頭を下げた。
「こちらは学校の生徒会でお世話になっている、浅井翼さん。浅井さん、うちの母です」
「あらあら、うちの真次がいつもお世話になっています」
「生徒会のことで話し合いたいことがあって、僕の部屋に入れたいんだけど、良いかな？」
「もちろんよ。お母さんは下にいるから、何かあったら呼んでね。それじゃ、浅井さん、ゆっくりして行ってね」
冨田の母は奥に消えた。
「良いお母さんですね」
浅井の言葉に冨田はため息まじりに答えた。
「悪い人ではないな、間違いなく。ま、上がって」
冨田と浅井は2階の真次の部屋に入った。途端に冨田は座り込んでしまった。
「ここが僕にとって不適切な場所だ。もっと正確に言えば、この向かいの兄貴の部屋が、だがね」
そのまま冨田は吐露し始めた。
「うちには優秀な兄貴がいてね。今はアメリカにいて、今度帰ってくる。父も母も、幼い頃は兄貴のことばかり見ていた。僕だって、成績が悪かったわけじゃないし、何か劣っているものがあったわけじゃないから褒められはしたが、いつも兄と比べられていた。目を見ればわかる。よくできたね、の後に兄貴ほどじゃないが、が省略されているんだ。君、僕の小学校時代の苦い記憶を知っているかい？」
もちろん、いじめられたことだ。
「友人から聞いた程度です」
「十分だよ。僕はいじめられて辛かった。何がつらいって、ついこの間まで楽しくおしゃべりしていた仲間が手のひらを返したみたいに無視をする、陰口を叩く、迷惑そうにこちらを見る。あの香川介でさえ例外ではなかった」
冨田はため息をついた。
「彼は何をしたってわけじゃない。いや、何もしなかったんだ。僕が泣いているのをただ悲しそうに見ていただけ。何も悪くない。何も悪くないんだ」
「でも、会長はさっき、裏切者だって、言いましたよね」
「はは、あのときは僕らしくなく感情的だった。今はもう、いやその直後に後悔したよ。それに君も香川君も裏切者の意味を誤解している。裏切者は彼だけじゃない」
冨田はゆっくりと深呼吸をした。

「僕にとっての裏切者は、かつての仲間全員だよ。いわゆる傍観者って奴だ。僕のことをいじめてくる奴らは別に良いんだ、何か気に入らないことでもあったんだろう。でも、傍観者は許せない。理由なんてないだろ。自分に害が及ぶかもしれないから勝手にしているだけだろ。あいつらはある一定の条件がそろえば簡単に手のひらを返すんだ！」
冨田の目から滴が落ちた。
「友達だって言ったのに、いやそんな奴こそ真っ先に、裏切るんだ。その上ほとぼりが冷めたら何事もなかったかのように振る舞いやがって……また同じ条件がそろえば裏切るに決まっている。何事もなかったかのように裏切るんだ！」
冨田の声が小さくなった。
「もう、誰も信じられるか。僕の周りは裏切者だらけだ」
「だから、自分に好意を向けて来る人間が嫌いなんですね。どうせ裏切るくせに、今だけ良い面しやがって。そう思うのでしょう？」
冨田は静かにうなずいた。それから浅井に顔を向けた。その眼には恨みが映っていた。
「お前だって同じだ。お前だって裏切るんだろう？僕のことを、簡単にっ。だってお前が僕を裏切らない理由、根拠、ないじゃないか！友達なんて嘘だっ、好きだなんて嘘だっ、お前は僕のことなんか見ちゃあいないんだっ！」
浅井は冨田のことを抱くように移動した。冨田の顔を覗き込んで、一瞬ためらった。
「私は会長の友達ではありません。私と会長は『副会長と会長』、ただそれだけですよ。私は会長について行きます。ただそれだけです」
その後冨田はずっと泣いていた。

翌日の放課後。冨田は浅井を呼び止めていた。
「僕はこの後少ししなくてはいけないことがある。後から行くから、先に生徒会室で待っていてくれ」
「はい、わかりました」
浅井は教室を出て行った。冨田は席に着き、本を開く。
この後に用があるというのは嘘だった。香川に昨日、言ってはならないことを言った。彼が今日生徒会室で冨田のことを待っていないわけがなかった。香川と冨田と浅井は同じクラスだが、当然教室でできる話ではないので、生徒会室で待っているはずだった。
そして冨田は香川と会いたくなかった。正直に言えば会って謝りたいのだが、うまくできる自信がなかった。だから優秀な浅井に頼んだ。きっと彼女なら冨田の気持ちをうまく伝えてくれるだろう。我ながら最低な奴だと冨田は思った。
冨田は本のページを一枚めくった。
それよりも昨日のことだ。昨日、浅井が一瞬ためらったこと。そのことの方が冨田にとってはるかに重大だった。浅井の『会長と副会長、というだけの間柄』という答えは唯一の正解だった。そして浅井はそれがわかっていた。しかし浅井はためらった。

つまり、浅井は冨田を助けることをためらったということだ。
（なぜだ？実は僕のことを嫌っていた？まさか。それとも逆か？好いているが故に、僕をこのまま死なせた方が良いのではないかと思った？そんな物語みたいなこと、あるのか？）
冨田は兄の帰還とともに自分が非常に不安定になるだろうことはわかっていた。それを止められる人間を探していて、浅井が目に留まった。優秀で、いつでも自分が望む反応をしてくれる。冨田が自身のことを好む人間が嫌いだから、完璧なまでに気のない振る舞いをした。なかなかできることではない。
（僕は、浅井君に殺されかけたのか）
そう思って、ふと浅井に好意を抱いている自分に気づいた。
（嘘だろ？はめられたとしか思えん。まさか、そのためにためらったのか）
そこまで考えて、冨田は本を閉じた。大きくため息を吐く。
（浅井翼。優秀で、美しくて、最凶の女、か）
冨田はそれからしばらくして生徒会室に向かった。